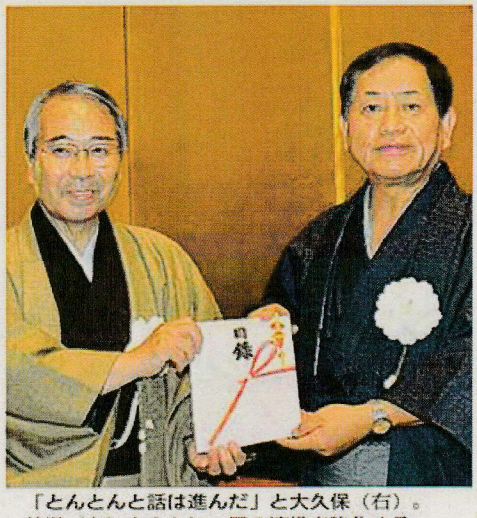
青春スクロール
母校群像記

首長たち 県境越え気脈 活性化に奔走


「とんとんと話は進んだ」と大久保（右）。前場（左）とともに一層の連携を強化する

栃木高校 7

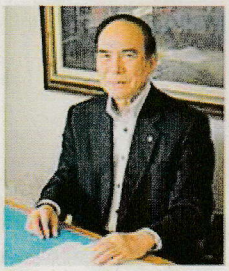
10月2日、小山グランドホテルで小山市と茨城県結城市の友好都市締結調印式が行われた。がっちり握手する両市長。全国でも珍しい隣県の友好都市締結に栃木高校（以下、栃高）が一役買ったと言ってもいい。

小山市長の大久保寿夫（66、1967年卒）と結城市長の前場文夫（71、61年卒）は期こそ違え、栃高の気脈が通じている仲だ。

前場は柔道部に所属、小柄ながら100キロ近い部員を相手に練習に励んでいた。が、さすがに体にこたえ途中から山岳部に。結城市、小山市、栃木市に住む同級生とは今でも交流を続け杯を交わしている。

大久保は農家の長男。「農林水産省に就職して農政をやる」と決意。片道12キロを自転車で3年間通った。無遅刻、無欠席。勉強、耐久マラソンとも10番以内を目標とし、3年間それを達成し続けた。「農家で浪人が許されず、必死に勉強した」。英単語の暗記に夢中になって堤防から転げ落ちたこともある。京大、東大大学院を経て農水官僚となり、初志を貫いた。環境問題にも精通。栃高時代と変わらない馬力で県南都市をリードする。

栃木市マスコットキャラクター「とち介」と一緒に笑う鈴木


創立120周年記念式典を取り仕切る大森

調印式で終始にこにこしていたのは小山商工会議所会頭の大森武男（71、62年卒）。2013年に栃高同窓会長に就任した。「水泳部の連中と水泳をよくやった。でももう少し勉強しておけばよかった」。県南経済活性化のキーマン。16年に迎える栃高創立120周年記念式典の総責任者でもあり、多忙な日々が続く。

栃木市長の鈴木俊美（64、69年卒）は悶々とした高校生活を送った。自信をもって入学したが周りは優秀な生徒ばかり。「世の中の広さを実感し、居場所がなくなった感じがした」。自分と向き合う時間は読書の時だけ。サルトル、ニーチェ、マックス・ウェーバー……。近くの大塚書店に寄っては社会科学系の書物を読みあさった。

時代背景も影響した。当時は大学紛争真っ盛り。何のために学ぶのか、自分は一体何をやりたいのか。高3の時にアルバイトでためた金でホンダのバイクを買い、学校をさぼって1週間ツーリングに出ていたら、「息子さんが最近顔を見せません」と学校から問い合わせがあった。

壬生町長の小菅一弥（52、80年卒）はソフトテニス部で3年間汗を流した。3年の時、市主催の大会でとんとん拍子で決勝に。相手は社会人チーム。「この調子なら楽々優勝だと思った」。ところがタイムのかけ方、ほめ殺しとも言える言葉の使い方にリズムを崩され敗退。「大人と高校生の差を見せつけられた」

正門近くにある栃高生のたまり場「みどりや」で、当時はやったインベーダーゲームに熱中した。産業用ロボットの世界四大メーカー「ファナック」（山梨県）の町内への進出が決まり、波及効果に期待が高まる。「（町議を6期務めた）おやじの代からの産業団地問題が時を超えて実を結んだ」と感慨深そうだ。

ファナック進出で町に勢いがつくと喜ぶ小菅

栃高生が通った大塚書店も今はない。放課後広谷書店も今はない。放課後のオアシスだったみどりやも月決め駐車場に変わった。それでも、それぞれの思い出の中に、青春の一コマとして生き続けている。（敬称略）

鈴木ら栃高生が通った大塚書店の跡はファミリーレストランになっていた

学校創立2年後の1898（明治31）年に「同窓会」と呼ばれる生徒の会が発足。卒業生だけで組織される本来の「同窓会」は1917（大正6）年にできた。1948（昭和23）年に同会を「栃木高等学校同窓会」と改めた。年1回の定期総会がある。戦後は柏戸貞蔵氏が初代同窓会長を務め、現在の大森会長で9代目。栃高の情報はustunomiya@asahi.comへ。

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。